

## 基調講演 「立ち上がる選択 性暴力被害後が生きやすい社会作りのために」

おおやぶのぶこ

大藪 順子 氏 フォトジャーナリスト 全米性暴力調査センター元名誉役員

ハートフルフォーラム ～性暴力被害とその支援について考えてみませんか～

開催日 平成26年1月29日(水)

会場 三重県立看護大学講堂

主催 内閣府・三重県

ども、こんにちは。今から1時間くらいお付き合い願えたらと思います。実は三重県でやらさせていただくのは初めてです。昔、子どもの頃に鈴鹿サーキットに来た思い出があるのですが、初めて津市に来させていただいて感謝しております。

写真をフォーラムが始まる前に見ていただけたと思いますが、このフォーラム後も、もう1回見ていただいたら感じ方も違ってくるのではと思いますので、それを心に留めておいていただけたらと思います。また、話の中で写真を見ていただきながら、私とその被害者の方たちから学ばせていただいたことも、シェアできたらいいなと思っています。あと、こんな話を聞いて、ちょっと気分が悪くなったり、何かあかんなど思った方は、迷わず安全な場所を探して移動してください。私が話をしている間に自由に出入りしてもらっても全然構いませんので、お願いします。

私の話は、1999年の8月9日に 始まります。その日は日曜日だったのですが、私はアメリカの新聞社で働いていて、ゴルフトーナメントの取材を一日中したおかげですごい疲れたので、家に帰ったら普段より早く床に就いていたんですね。それで、夜中の何時か覚えていないのですが、トイレにでも行こうかなと思ってふと起きあがって、私のベッドルームのこちらにドアがあるのですが、そこをフツと見たら、人影があったんですね。私は夢を見ているのか、それとも実際に誰かいるのか、考えている自分を覚えていません。何か時計が止まってしまったような感じでした。その人影がどんどん近づいてきますから、私は当然逃げるわけです。でも、捕まってしまった。

私は一生懸命叫んでいたつもりだったんです。「助けて！」と言ってたつもりだったんです。でも、気付いたら、私の口からは何の音も出てなかったんですね。体が凍りついて。自分が何をしなければいけないかというのは分かっているんですよ。助けを求めないといけないとか、逃げなければいけないとか。分かっているんですけども、あまりにも突然の恐怖で、体がすごい硬直するというか、フローズドというのですかね。凍りついて頭と体がつながらないというか、そんな体験をしたんです。逃げなあかん、叫ばなあかん、分かっているてもできないんです。

性暴力の被害者の方たちがよく言われるのは、「どうして逃げなかったの。どうして助けを呼ばなかったの。何で叫ばなかったの」、「ということは、あなた、そういうことをされたかったんでしょ」ということまで言う人だっているんですね。ひどい話だと思います。できないんです。したくても、声が出ないんです。あまりの恐怖で。正直、私は自分がそういう立場に置かれるまで、性暴力というのは、こういう場所でこういう人でこんな格好をしている人たちだけに起こると先入観がいっぱいある人間だったんですね。性暴力なんて関係ないわと思っていました、正直。それで、そういうことが私に起こったら、私は闘ってやるとまで思っていたんです。

でも、自分が鍵をかけて安全なはずの家の中でそういう暴力が起こった時、私がそれまで抱いていた安全観・安心観というものが崩れ去ったわけです。それまで自分が一生懸命築き上げてきた自分というものがあったんですね。頑張っってここまで来たとし、アメリカでもバリバリ働いていて楽しい生活しているし、頑張っってここまで来たのに。その自分が、あの暴力1つですべてが崩れ去る。そんな体験だったと思います。私の人生の中で、初めてどん底というものを味わった気がしました。

では、そこから何ができる、どうしたらよいのだろうか。特に性暴力となると、私たち1人1人の根底にある性というアイデンティティに傷が入りますから、「私って何なの？」と。「何で私にこんなことが起こらなければならないのか」という疑問。その答え探しが始まりました。

早い話、私を襲った犯人というのは、その事件が起こる1年くらい前に、3か月くらい隣に住んでいた人なんですね。私は顔もはっきり見ました。でも、名前は知らなかったの、警察の人に事情聴取された時に、1年くらい前に私の家の隣に住んでいた人だったということから捜査を始めていただいて犯人が捕まりました。そんな中で「どうして私にこんなことが起こるんだ」という疑問というのが、一番大きかったと思います。

私は今まで様々な性暴力のサバイバーの人たち、被害者の人たちの話を聞く機会を与えられてきたのですが、その人たちが何を探しているかという、やはり「何で私の人生にこんなことが起こらなければいけなかったのか」という質問の答えなんですね。その話は後でもう少ししますけど、「どうして私に？」という疑問と共にどん底という経験を初めてした時に、自分はどうしたらいいのだろうと途方に暮れました。

ここは看護学校なので、私が受けたケアのプロセス、心の回復のプロセスの中でどういう支援を私が受けたかという話をしていきたいと思います。

レイプという被害の後、犯人がパタッと立ち上がって、彼がこじ開けて入ってきた裏口のドアから犯人が出て行きました。何で分かったかと言うと、彼がこじ開けて入ってきた裏側の窓が閉まる音がした。私はそこで、この時しか逃げる時はないと思いました。アメリカですから、銃か何か持ってこられて撃たれたら怖いというのがありますしね。とにかく逃げようと思いました。その時はTシャツ1枚しか着ていなくて、他には何も着ていなかったのですが、なりふり構わず私は表側のドアから、私は2階にいたのですが1階まで出て行って、いつも挨拶するくらいの顔見知りのおじさんがいたのですが、その人のドアをバンバン叩きました。それで、そのおじさんが出てきて、私の姿を一目見るなり、すぐに警察に連絡してくれました。

ものの10分も経たないうちに、警察が2人やってきました。そのうちの1人が私のアパートに上がって行って降りてくるなり、自分の相棒に私のアパートの裏口が壊された形跡があると報告をしたんですね。それで、その警察官の人たちが、「着替えを持って、急いで救急病院へ行こう」と言うんです。不幸中の幸いで、私は殴る、蹴られる、切られる、撃たれるといった血を流すような怪我はなかった、目に見える怪我というのはなかったんです。ですから、私自身が「何で救急病院に行かなければならないんだろう」と思いました。

でも、救急病院で私を待っていたことというのが、レイプキットという、アメリカの救急病院に必ず置いてあるこれくらいの箱なんですけど、その中に被害者の体内から加害者のDNAを検出するという道具ですね。それを使っっての証拠採取するという作業でした。私にとってはすごく屈辱的でしたね。人の一番プライベートな場所が、私の許可もなく赤の他人に触られるわけですから。しかも同じ晩に2回も。そんなに屈辱的なことはないですよ。1999年のあの当時は、たまたまなのかもしれませんが、私にレイプ検査をしてくれた看護師の人がきちんとやり方を知らなかったのか、トレーニングを受けていなかったのか分かりませんが、私の許可、私の気持ちとか全く関係ないところで作業を行われたんです。ですから、私にとっては、

すごい苦痛だった。

でも、数年前に病院にそういう看護師たちの研修に行かさせていただいた時に、SANEと呼ばれる看護師たち、Sexual Assault Nurse Examiners と呼ばれる看護師の人たちがきちんと性暴力被害者の気持ちをケアしながら対応するという研修を見ていると、1つ1つ作業をするのに被害者から許可を得てするようになっていました。例えば、被害者の証言で「ここを舐められた」という証言があったら、「そこに綿棒を当てます。いいですか」といちいち聞くんです。被害者が「いいですよ」と言わないと、その行動を始めません。私はすごいよいことだと思いました。

やはり私が経験したレイプ検査というのは私の許可なしで行われたわけです。それはどういうことかと言うと、その前にすでに私は私の意思に関係なく体を奪われているわけですから、すごい無力感というものを感じていたと思うんですね。そういう中で、また違う人に勝手に私の体を触られるということに対して、すごいトラウマを生むのです。ですから、1つ1つちゃんと被害者に許可を求めて、そして被害者が「いいですよ」と許可を出して初めて作業が始まることによって、本当に些細なことかもしれませんが、やはり自分でコントロールできていたものがコントロールできなくなってしまう被害者の人たちに、「あなたにも YES か NO か決める権利があって、あなたの人生はあなたのコントロール次第だ」ということを、些細な1つ1つの作業ですけど、そういうところから被害者の人たちの尊厳を戻していくという作業でもあるのです。それは本当にエンパワーメント(Enpowerment)につながっていくんだなということ、後々私は思うのですが、残念ながら私の時はそうではなかった。

レイプ検査が終わって、私は自分で持っていった着替えを着て、「ちょっと待っていてください」と言われたので救急病院で待っていたら、今度は刑事さんがやってきました。刑事さんは1人、女性を連れてきたんですね。その女性というのは、私が住んでいた地区のレイプクライシスセンター(Rape crisis center)と呼ばれる被害者支援センターからの、アドボケイト(advocate)と呼ばれる支援員の方でした。被害者支援の人が、駆け付けてくれたんです。本当に、夜中の2時か3時か私は覚えていないのですが、そんな時間に全く赤の他人のために駆け付けてくださる人がいるって、すごいなあと思いました。

その女性が席につくなり、まず私に言ってきたことというのは、「今夜起こったことは、あなたのせいじゃないのよ」という言葉だったんですね。はっきり言って、正直、私、逆ギレしましたね。当然だと。私は自分で鍵をかけて寝ていただけであり、私が悪いわけがない。でも、後あとになって「もし、もう1つの頑丈な鍵をつけていたら、あの男は入れなかったんじゃないか」とか、「何であの夜、私は友だちの家に泊まりに行っていなかったのか」というように、何か自分に非があるように考えていたんですね。そういう意味では、私が悪いわけじゃないと頭では分かっているのですが、心がついていかないという、そんな感じだったと思います。

ですから、自分の意思でちょっと信頼した相手と飲みに行ったり、デートしたり、その先で突然暴力をふるわれた。そういう被害者の人たちが自分を責めてしまう。または、社会が「何で、そんな人と一緒にいたの」と、被害者の方を責めてしまう。非常にアンフェアというか、不公平だと思います。

暴力というのは、被害者の意思では起こりません。加害者の意思でしか起こらないんです。私も高校を卒業するまでは日本にいたのでよく覚えているのですが、「痴漢に注意」という呼び掛けを皆さんもよくご存知だと思います。数年前に私の友だちがメールで送ってくれたのですが、どこかの山で見つけたというサインを送ってくれて、それが何て書いてあるかと言うと、「クマと痴漢に注意」と書いてあったんですね。それはちょっとクマに失礼だろうと思います。

どれくらい注意しろと言っても、被害に遭う可能性のある人に「注意しろ、注意しろ」と言ったところで、そ

の人の意思で起こるわけではないんです、暴力って。そんなこと言っても、起こる時は起こってしまうんです。加害者の意思でしか暴力は起こりませんから、社会は加害者に向けてメッセージを発信しなければいけないわけです。東京の地下鉄でもやっと思えるようになりましてけれども、「痴漢は犯罪です」という言葉が使われるようになってきましたね。従来私たちが聞いてきた言葉というのは「痴漢に注意」の方が多いですから、被害に遭った時に被害者が「ああ、私が注意しなかったからいけないんだわ」という意識につながってしまうわけですね。ですから「結局、あなたが不注意だったから、そういうことが起こるんでしょ」と言いやすい社会であるわけです。「あなたがいつもだらしがないから、そんなことが起こったのよ」とかね。

「何で、そんな人と一緒にいたの」とさっきも言いましたが、被害者が勇気を出して、この人なら分かってくれるだろうと思って、お母さんなりそういう人にやっと思いで打ち明けたと思った時、その信頼していた人からそんな言葉が浴びせられたら、被害者は二次被害を受けることになります。心の回復って可能なのですが、その可能であるはずの心の回復がそんな二次被害を受けることによってすごく遅れてしまうんですね。10年、20年、30年とずっとその痛みを引きずってしまう人が増えてしまうわけですね。ですから、社会全体が、被害者は悪くないという意識をきちんと持って被害者のことに気付いていくということが、とても大切ではないかと思います。

アメリカでは、毎年 600 ミリオンドル、あとで円に計算してくださいね、600 ミリオンドルが毎年、性暴力のために使われています。その内訳は、被害者支援、加害者対応、啓発キャンペーンだけでなく、裁判などにかかる経費や、被害者のその後にかかる生活支援や加害者にかかる刑務所内での費用なども含まれています。それを、50 州ありますからそこに振り分けて、その州のやり方で防犯キャンペーンしてもらったり、加害者対策をしてもらったり、被害者支援をしていただいたりということになります。性犯罪は財政問題だからなんですね。

性暴力を受ける被害者たちというのは、よほどのことがない限り、すごい経済的支出があるんです。性暴力を受けて精神障害が現れる人が非常に多いですから、それぞれ普通に自活して、普通に会社に通っていたのに、それができなくなってしまう人が増えてしまうのです。そうなった時に、どうしても生活保護を必要としますよね。また、それまで普通にその人らしく生活していたのに、性暴力に遭ったおかげで、それができなくなってしまう時、引きこもってしまったり、自死という選択をしたり、そういう人たちが増えます。

今、日本では、引きこもっている人たちが 70 万人くらいいると言われてますよね。そして、約3万人くらいの人たちが自殺をしています。ざっと計算しても、それだけの数の人たちが機能していないのです、この国では。ということは、それだけ日本という国は生産力を失っているわけですね。そういうことも踏まえて、性暴力は経済問題であることをきちんと踏まえて、性暴力に関する対策というのが必要ではないかと思います。

早期の支援によって、被害者の人たちの心の回復が早まると私は思います。どうしてかという、私はその例だからです。私は最初からいろんな人たちに助けをいただきました。警察が来て、警察が病院に連れて行ってくれた。その病院で、刑事さんが支援員の人に私を会わせてくれました。私には私の味方になってくれる人がいるというのを、最初からよく理解できました。だからこそ最初から私は自分が悪いという意識もないですし、会社にも実はこういうことがあったんだという話を同僚にしても、誰も私を責める人がいなかったんですね。ですから、私は非常に稀な被害者なんです。非常にラッキーだった。

ほとんどの人たちは、そうはいきません。どうしてかという、アメリカの統計では 85%くらいは被害者の人たちは顔見知りから暴力を受けていますから、自分が悪かったと思うとか、助けを求めたくても求められ

ないというケースが非常に多い。日本でもそうだと思います。ちゃんとした統計が出ていませんが、だいたい同じ状況じゃないかと思います。

言ってみれば、私のケースというのは、社会が受け入れやすいレイプのシナリオです。まったく知らない誰かがひとり暮らしの女の家に入ってきてその人を襲うという。映画とか、皆さんもそうかもしれませんが、私が被害に遭う前に持っていた先入観というのが、そのままそこで行われたわけですから。社会が受け入れやすいレイプのシナリオですから、誰も被害者は悪くないと、誰もが分かってもらえる。でも、現実はそのようなケースがほとんどです。

最初から私は支援を受けたおかげで、その後も非常にスムーズだったんじゃないかと思います。もちろん、私にも被害の後2年くらい、鬱という状況というがありました。PTSDと診断されたわけじゃないですけど、そういう状況になりましたし、また、事件が起こった街に住み続けることができなかったので、違う州・違う街に移って行きました。そこで、私はもう大丈夫と思ったんですけど、気が付いたら、やはり悪夢にうなされてるとか、パニックアタックに襲われるとか、そういう症状が出るのが非常に多くなって普通に生活することが大変困難になりました。

そのような中で、どこに行ったら助けがあるのだろうと考え始めました。どうしても、誰に電話をしたらよいらだろうと考えるわけですよ。それで、レイプ・クライシス・ホットラインという24時間のホットラインがアメリカにはありますけど、そこに電話をしたのですが、電話を受けた人が、私の事件というのは実は1年前の話なんだということになると、「そういうことでしたら、朝になって電話をしてください」と言われるんですよ。もうちょっと話を聞いてくれてもいいんじゃないかと思いました。そんな所に電話する人たちというのは過去何年か前、10年、20年前に受けた暴力でずっと苦しんでいて、よっぽど緊急な心理状態ですからホットラインに電話するんです。私もそのうちの1人でした。

ちょっと話が前後しますが、最初から私はいろんな支援を受けさせていただいて、本当に私はラッキーだったんですね。アメリカにはそういう体制、Sexual Assault Resource Teamという、直訳すると「性暴力被害者対応チーム」でしょうか、警察、医療、司法、そして福祉関係の人たちがチームとなって被害者を助けていくという体制、システム化されたものがあります。その中に私はボンと入れられて、被害者として直後はパニック状態ですから、どこに行って何をしたいか分からない、書類上のこととか、裁判起こすにはどうしたらいいかって、やはり被害者は分からないじゃないですか。そういうパニック下にある(パニック下にある)人を、まわりが助けていく。そのパニック下にある(パニック下にある)人が自分で考えて行動しなくてもいいように、まわりが手を差し伸べてくれるという体制でした。

私の犯人は事件3日後に捕まりまして、裁判にかけられました。裁判のための事情聴取がどこで行われたかという、あの時に病院に来てくれた刑事さんがメインの人になって私につながってくれて、警察に事情聴取に行った時に、もう1人の刑事さんと、州があてがってくれた検事さんが同席してくれたんです。どうしてそういう人たちが同席したかという、やはり被害者にとっては、思い出したくない話を口にするって、ものすごく大変なことなんですよ。ですから、その話が1回で済むようにという配慮で、被害者の話を聞かなければいけないような人が皆一箇所に集められるんですね。

残念ながら日本では今警察に届けを出したところで何回も何回も同じ話をさせられて、さらにトラウマを煽られているというのが現状です。あげくの果てには、実況見分というんですか、実際に事件があった所に連れていかれて、こういう状況でこういう格好で何をされましたという証言をさせられる。被害者にとってはそんな怖い話はないですよ。それでさらにダメージを受けて、本来回復できるはずの心が回復不可能になってしまうことだってあるわけです。これだけDNAの技術が進んでいるこの世の中で、正直そんなこ

とする必要ないんです。

アメリカには、ニューヨークにDNAセンターという所があるんですね。そこで今も9・11のあの事件で亡くなった人たちのDNA鑑定をやっているのですが、そこに性犯罪被害者のレイプキットがくるわけですね。そうしたら、何をやっていても作業をいったん止めて、とにかくレイプキットの検査をすると言うんです。どうしてかという、アメリカの統計では、1人の加害者の一生につき、平均60人の被害者がいると言われています。ですから、1人の加害者を捕まえることが、すごい大きな社会貢献になるんです。

そのDNAセンターの中にDNAバンクというものがあって、それまでの犯罪加害者のDNAがバーストそこにあります。レイプキットで来たDNA鑑定で、もしそこに既にDNAバンクにいる人とマッチすれば、それでその人を捕まえらるるわけです。間違った加害者を捕まえる必要がなくなるわけですし、DNAの技術というのをもっと使うべきだと私は思います。

そんなこと言うと、DNAバンクの採用は加害者の人権侵害だと思われる方にもう1つ言わせていただければ、もっとひどいことにアメリカでは、性犯罪で捕まって刑務所に入っていて出所してきた人たちは、その後最低3年間はインターネット上にその人の写真と一緒に住んでいる場所を載せられることを義務付けています。それは加害者のプライバシーの侵害だと言う人もいますが、どうしてアメリカはそれに踏み切っているかという、やはり再犯を防ぐためです。州によっては、その人たちが小学校とか幼稚園の何メートル以内にも住めません。そういう厳しい所がたくさんあります。

なぜそんなに厳しいかという、やはり他人のプライバシーを奪った人間が自分のプライバシーをエンジョイする権利はないという、そういう考え方が根底にあるんですね。被害者にしてみたら一生、精神障害とか抱えているんですね。一生、苦しんでいるんです。その人は一生、恐怖という檻の中に入れられてしまったような感覚で、いつもビクビクして生活しているんです。そういう人たちと比べたら、「3年くらい我慢しろ」ということでもあると思うんですよね。

それくらい厳しくやっているというのは、やはり性犯罪の加害者というのは再犯を起こしやすいからなんです。新しい被害者が出てくることによって、社会全体がすごい損をします。先ほども言いましたが、経済的生産力、そういうことにつながっていきます。ですから、性暴力の加害者を捕まえて、きちんとした対応をしていく。加害者の人たちにもカウンセリングは必要だと思いますし、そういう再犯を防止するためのプログラムも当然、被害者支援と並行して行っていく必要があるわけです。きちんとそこをやっていかないと、次は誰が、どの家族が悲しみを背負わなければならなくなるのか分かりません。アメリカは随分積極的に、性暴力については活動を行っています。日本も、そういう社会になったらいいなと思います。

私が被害者の人たちの取材を始めて、写真を撮って、実名で顔も出して、自分の身に起こったことを語るというプロジェクトを始めた時に、その当時2001年でしたけど、今から12〜3年前はまだアメリカのメディアでも、性暴力についてはなかなか取り上げられなかった社会なんです。取り上げたとしても、非常に被害者が傷つくような表現があったりとかですね。日本のメディアでも、最近やっと「いたずら」という言葉を使わなくなりましたが、やはりまだまだそういう言葉を使うメディアの人はたくさんいます。アメリカの2001年のメディアも、やはりそういうものでした。

でも、被害者の顔が見えてくることによって、また実際の声が聞こえてくることによって、具体的な支援が見えてくるわけです。具体的に、この人たちにどういうことが必要なのかということが、明確になってくるわけです。そして、それまでの性暴力の被害者に対する社会的な先入観が崩れていきます。今のアメリカのCNNとかを見ると、性暴力の被害者も随分インタビューを受けやすくなってきました。

もっとすごいことは、2年前にペンタゴンが米軍基地の中でどれくらい性暴力が行われているかというこ

とを、やっと認めました。2年前の話です。年間 3,000 件以上あるだろうと言われていました。女性兵に対してですね。またはセクシャルマイノリティの人たちに対する性暴力も存在します。それをペンタゴンで認めたということは、すごいなと思いました。どうしてすごいかというと、それを認めることによって、今度は基地内に支援員を置いたり、カウンセリングのセンターを作ったりと、またお金がかかるわけです。これだけ経済困難とアメリカも言われている中で、それをするというのはすごい勇気のいることだなと思いました。トップの人たちがやっと聞く耳を持ってくれたんだなと思いました。それはやはり、この 12 年くらいの間に、被害者の人たちが顔を出して語るということがあったからだと思います。その勇気ある行動。それが、他の被害者の人たちにも勇気を与え、社会的にも「あなたは悪くないんだよ」というその意思が伝わった成果じゃないかなと思いました。

ここは看護学校ですから、この中には看護師さんになる人もたくさんいらっしゃると思います。きっと現場に出た時に、性暴力に遭った人、またはDVの被害者の人たちと向き合うことが必ずあると思います。特にDVの被害者の人たちは、半殺しにされて、怪我を負って、命からがら病院に来たと。でも、その治療を受けて、ちょっとよくなったら、加害者の元に帰って行くという人が多いです。傍から見ていると、何でそんなことするのと思うわけですね。だってその人の命が今度は危ないのですから。でも、やはり経済的な不安から、あるいは子どもがいるから、そういうような理由から加害者の元に帰って行く被害者女性というのはたくさんいます。

そういう人たちを目の当たりにした時に、自分の無力さというのをつくづく感じると思うのですね、看護師として。あるいは、医療関係者として。私に何ができるんだろうか、と思うと思います。どんな問い掛けをしたところで、そういう人たちは帰って行くんです。アメリカの統計でいえば、実際に離婚とか、きちんとその加害者から離れるまでの間に、7回くらい加害者の所に行ったり来たりするといいます。その中で、当然、命を失う人も少なくないわけです。

言ってみれば、病院に来れた被害者というのは、すごいラッキーなんですね。その時が、その人の命の生きるか死ぬかに関わってくる問題でもあるのです。アメリカの病院の女性のトイレ入ったら、ドアを閉めると、ドアの所にホットラインの番号とかを置いてありますが、そういう情報を、病院の中で少なくとも渡していただきたい。そういう人に出会ったら、「1人で苦しまなくていいんだよ」ということをさりげなく伝えてあげて欲しいと思います。「ここに行ったら、ここに電話をしたら、助けがあるんだよ」ということを伝えてあげて欲しいと思います。その人の命に関わることです。「そんな形で命を失わなくてもいいんだよ」と、教えてあげて欲しいと思います。でも、当然、勤務しているわけですから、仕事場でそんな個人的な話なんてできる人なんてほとんどいないと思いますから、さりげなく言っただけだったらいいなと思います。

性暴力に遭った人が目の前に現れたら、きっと皆さんはどうしていいか分からないと思うんですね。私も、そうでした。そういう中で、何を言ったらいいんだろう、何か言ったら傷つけてしまうんじゃないか、そういう恐怖もあると思うんですね。でも、少なくとも、「あなたに起こったことはあなたのせいじゃないんだよ」ということは、言ってあげて欲しいと思います。もちろん、その言葉が一人歩きしてはいけません。どうしてそうなのかということも、きちんと伝えてあげて欲しいと思います。あなたがどんな状況であったとしても、加害者の意思でその暴力が起こったのであって、あなたが何をしても暴力が起こったわけじゃないんだと。

それで1つ思い出したのですが、私は今横浜に住んでいるのですが、その前は過去 2006 年から日本でこういうお話をさせてもらっていますので、毎年日本に帰って来ていたんです。それで、娘を連れて帰国していました。娘が4才、5才くらいの時に日本に帰って来て、何が見たいと言ったら、『プリキュア』です

ね。小さい娘ですから、そういうのにすぐはまってしまうわけです。

あれを見ていて私はすごい違和感あったんですよ。正義の味方はいいんです。悪者やっつける。それはいいんです。でも、どうして正義の味方がいつもああいう短いスカートを履いているのか、それが分からない。子どもは『セーラームーン』とかが好きですが、私よりもっと古い人は『キューティハニー』とか、そういう人たちがいつも短いスカートを履いていたり、胸が見えるような服を着ているわけです。それを見て育った人たちが「こういうのが可愛い」というイメージを擦り込まれているわけですよ。それで、中学生、高校生になって、そのイメージでもって、短いスカートを履いていたり、これがかわいいんだと思ってそういうファッションして、もしそういう格好している時に何か起こった時に、特に性犯罪がその人の身の上で起こった場合、社会はその人をどう言うのでしょうか。「そんな短いスカートを履いているあなたが悪いじゃない」と言うわけですよ。では、誰のためにそういうイメージ作りがされているのか、ちょっと考えていただきたいと思います。

去年の夏から日本に住むようになって、本当に怖いと思うのは、やはりそういう日本社会なんですよ。コンビニに行っても、子どもの目に届く所にアダルトの雑誌が置いてあるとかですね、どこのビジネスホテルに行っても絶対アダルトビデオが見られるようになってるんです。私はいま女性用のフロアに泊めてもらっているんですけど、そこでも必ず置いてあるんです。女性でも見たい人は見たらいいんですけど、その辺は勝手ですけど、でもなぜかホテルには必須とでもいうように置いてあるみたいな感じがします。

皆さん、日本にいらっしゃってご存知ないかもしれませんが、日本は、世界からアダルト業界で非常に有名です。しかも、日本が発信しているアダルトビデオは、非常にひどいものが多いです。暴力的なものが多いです。それが、アンダーグラウンドで世界中を回っている。それで、日本の男はこういうことをするんだ、日本の女はこういうことをされて喜ぶんだとか、そういう意識につながっているんですよ。とても恐いことだと思います。真面目に生活している日本人には、とても失礼な話だと思います。そういうことは、私たちがきちんと社会に問題提起していかなければならないんじゃないかと思うんですよ。特に性暴力を防止しようと思った時、やはり私たちのまわりにあふれているイメージというものから改善していく必要があるんじゃないかなと思います。

というのも、アダルト業界が生み出している間違っただなセックスに関する考え方というのが、言ってみれば若い人たちのテキストブックになっているわけですよ。学校できちんと性教育が行われているかという、どうなんだろうかね、今の状況。それよりも、やはり雑誌だとかビデオから入ってくるイメージ。それによって、ああセックスってこういうものなんだと学んでいる人の方が多いと思うんですよ。

残念ながら、私もそうですけど、親から性教育を受けていません。親にそういう話をされたら、「気持ち悪いからやめてください」と思う人は多いと思います。ですから、やはり毎日顔を合わせている人が性教育をしていくのは、ちょっと難しい話だと思います。恥ずかしいという気持ちも、正直あるでしょう。アメリカでよくなされている取り組みとしては、学校とは関係のない第三者の人に、その分野のプロを呼んで、知らない人から淡々と話をしてもらおう形をとって、性暴力についても話をしてもらっている。またデートDVということに関しても話をしています。

私も1回、娘が幼稚園の年長組さんの時、5才の時ですが、アメリカの学校でボランティアをしていた時に、そういう場面に出くわしました。それは、性教育の名の下に行われていたものではないんですけど、学校外から来た女性が4才児や5才児に何を言っていたかという、嫌な時には嫌だと言っていいんだよということです。「お友だちにハグされて、それが嫌だったら、嫌だと言っていいのよ」ということなんです。はっきりしなさいと。「言われた方も、嫌われたからじゃないんだよ。その人がただハグされたくなかったという



ことを理解しなさい」と、5才児にしゃべっているんですね。そうやって、自分の権利ということを小さい時から学ばせているということは、すごいことだなと思いました。今、日本の女性の中で、体を求められて NO とハッキリ言える人がいるのでしょうか。女性が NO を言いにくい社会じゃないかと思うんですね。言っていないんです、当然。でも、それが言える人って、どれくらいいるんだろうと考えます。

ここで、時間もなくなってきたので、写真をお見せしながら、パツパツとお話をさせていただきます。ライトを落としていただいて、画面の方をお願いします。

皆さんには写真展示を見ていただいていると思いますが、この写真のダニエルさんという方は、私が出会った時は 25 才でした。それで、これは彼女が5才の時の写真なんですね。ブーツを履いて、足を組んでいるのがダニエルさんですけど、その横にいるお嬢さんは、彼女のいとこさんで、同い年だと言います。いとこさんは無邪気な5歳児なんですけど、ダニエルさんの方は無邪気さがもう失われている、そんな感じですよ。この写真の裏には、彼女のお父さんという人が、娘を売春婦みたいな格好をさせたり、セクシーな態度を取らせたりとか、そういう形で性虐待が行われていたということだったんですね。子供たちが家庭の中で虐待に遭う時、ヘルプを求めたくても求められないのですね。どんなにひどいことをされていても、どんなに虐待を受けても、子供たちからすれば親なんです。ですから、引き離されるのが怖いわけです。でもアメリカでは、きっぱりと引き離します。と言うのも、その子の将来に関わるからです。その子の心のケアをいち早くすることによって、その人らしく生きていけるように、またその人が将来同じような間違いを犯して、他の人が傷つかないためにも、きっぱり離します。でも、子供にとっては、すごいトラウマですよ。

クリスさんという彼女は、児童ポルノの被害者です。彼女は私よりも年上で、今 45 才くらいなので、私たちが育ってきた 1970 年代というのはインターネットがありませんので、彼女の写真がネット上にないことを願いますが、今の時代は怖いですよ。今被害に遭っている子供たちは、もしかしたら自分がそんな被害に遭っていることを知らないと思います。でも、大人になって、自分が何をされていたのか気付いた時、その人の苦悩というのが始まります。そこから精神障害が始まり、鬱になったりするわけです。ですから、今くい止めなければいけない問題だと思います。

先日、広島の方の私立の中学校と高校に行ったんですね。その時に、そこで問題になっていたことというのは、中学生がネット上で知り合った人に裸の写真送れと脅迫されて、恐くて送ったというのですね。それが将来的にどのように悪用されて、どういう所で出てくるか。1回ネットに乗ってしまったら、半永久的に残るわけです。たとえば自分で Facebook に載せた写真とかも、削除してもどこかにデータは残っているわけです。そんな恐怖を、その子たちはずっと抱えていかなければいけないのでしょうか。とても怖い話だと思います。だから、私は中学校とか高校に行く時には必ずそこを強調するんですね。「写真をアップする前に、もう1度考えましょう」と。「大人になって、写真を子供に見られてもいいですか、もう1回、考えましょう」と。それがどのように悪用されるか、分からない時代です。

このマイコさんは兵庫県の方ですが、彼女が中学生の時に、帰宅途中で警察を装った男に捕まりまして、それで性虐待を受けたんですね。それ以来、彼女は自分を「汚い、汚い。もう私には価値がない」と思って生きるようになったと言います。おかげで、自傷行為というのが始まるわけです。自傷行為と言うと、リストカットとかそういうことを思い浮かべるかもしれませんが、彼女の自傷行為というのは、自らがテレクラなどへ電話して、夜な夜な誰かに身を寄せると言う行為だったんです。性暴力の被害者の人たちによく見られる傾向としては、自分が汚れてしまったから生きている価値がないんだと思って、自分の価値を見失っている人たちがすごく多いですね。本当に自分の人間としての尊厳だったり、自分の価値観だったり、自分がこれまで持っていた自尊心というのを失うことって、すごい怖いことだなと思います。それが、自傷行

為、自爆行為につながっていったるわけですね。

被害者の男性も、非常に多いです。アメリカでは、18 才になるまでに4人に1人の女の子、6人に1人の男の子が何らかの性暴力を受けるという統計が出ています。それくらい、性暴力は多いです。日本ではそんなことないだろうと皆さんは思われるかもしれませんが、いやいや、日本にもあります。日本では、いじめという言葉の陰に隠れて性暴力が多発していると、私は考えます。私の大学時代の友だちで、留学していた日本人の友だちがいますけど、彼もその1人でした。私がこういう活動を始めてから、彼もそんな話をしてくれたのですが、クラスみんなの前でパンツを下ろされたりとかね。それが非常に大きなトラウマになって、今も苦しんでいる。いじめという言葉で済まされてしまって、きちんとその子が受けた心のケアというものがなされていないのが現状だと思います。

このデイビッドさんという彼は、自分が子どもの時、従兄弟に性暴力をずっと受けていた人ですが、女性センターというのはたくさんありますけど、男性センターというのはもちろんありませんから、男性が被害に遭った時に、どこにヘルプを求めればいいのか分からないのが現状です。

次の写真ですが、性暴力の被害に遭った人たちに多く見られるのは、拒食症だったり、過食症だったりという症状、そういう障害ですね。この彼女は、食べれなくなってしまった人ですね。

この次の写真は、先ほども言いました自傷行為のリストカット。

次のこのアーサーさんという方は、「30 年くらい前の話なんだけど」という言葉から始まるんですね、私が取材した時に。「自分はその時通っていた教会の神父に、性虐待をされたんだ」と。その神父は、ストリートにいる子供たちに手を差し伸べるということでボストンで有名な神父だった。でも、その神父が影で何をやっていたかという、そのストリートにいる行き場のない子供たちを集めて、性教育という名の下で虐待を行っていたんだと。この人も、その被害者のうちの1人でした。この人の話がボストングローブという新聞に載った時、その加害者の神父は逃亡生活を始めました。でも、3か月後にその人は捕まって、刑務所に入れられてしまうわけですね。裁判の結果、その神父は、2百何十年というんでもない終身刑を受けたわけですが、その加害者1人につき2百何十人という数の被害者がいたわけです。ですから、本当に1人の加害者に対してきちんとした対応をすることによって、心を痛めなくてすむ人が増えるんですね。

これは、ハワイのホノルルのあるオアフ島の中腹に女性の刑務所があるんですが、そこに招かれた時に撮った写真なんですけど、そこのカウンセラーの方が私に教えてくれたことというのが、ここに来る女性たちの 85%は、なんらかの罪を犯して刑務所に入るその以前に、性暴力を受けているという実態があるそうです。

もう1人、刑務所外で、10 才の時から 35 才の時まで、ずっと少年院や刑務所を出たり入ったりしている女性と会いました。その人自身も、子どもの頃に性虐待を受けているんですね。彼女いわく、「自分の幼少期に性虐待を受けたものですから、何がよくて何が悪いということが分からなくなりました」。それはどうしてかという、「自尊心がなかったから。自分の価値観というものが分からなかったから」と言います。とにかく心の痛みというものをどうにかしたくて、アルコールに走ったり、ドラッグに走ったりするわけです。この人たちもそうでしたけど、そのドラッグを買うためにお金がいりますから、そのために盗みをしたり、売春をしたり、いろいろな犯罪に手を染めていくわけです。ですから、虐待から子どもを守るということは、将来の犯罪防止につながっていくわけですね。私たちは日本の社会の人間として、子供たちを守っていくという義務があると思います。それを私たちはもっときちんとやっていかなければならないんじゃないかと思えます。

クリスティーナさんというこの彼女は、デートDVの被害者です。彼女は13 才から16 才のときに付き合っ

ていた彼氏から暴力をずっと受けていました。その多くが性暴力だったと言います。暴力を受けるたびにその加害者の男は、「お前が悪いから、こんなことをするんだ」と言うわけです。でも、被害者の方は自尊心というものを失っていますから、加害者からそんなつじつまの合わないそんなことを言われても、「ああ、そうか」と思ってしまうわけですね。ここには若い人がたくさんいますから、はっきり言わせていただきますが、そんなしょうもない人間とは、きっぱり別れた方がいいです。はっきり、別れましょう。自分が傷付いてしまわないように、別れてください。離れてください。別れ話になって暴力を振るわれるなど、最近そういう被害者が非常に多いです。また、皆さんも記憶に新しいかと思いますが、ストーカー事件というものもあります。ですから、そういう危険性がある場合は、きちんと警察に電話をしてください。助けてくれる人に電話をしてください。自分の身を守るということは、とても大切なことです。

この写真を最後にしますけれども、リンダさんというこのおばさんは、ありとあらゆる精神障害を抱えている人だったんですね。私が知っている障害をみんな、この人は持っていた。この人のことをカウンセラーを通して私は紹介していただいたのですが、このおばちゃんは1つ、胸を張って言ったことがあったんですね。それはどういうことかという、自分には2人の娘がいると。その娘たちを自分は、自分が受けた性虐待からは守ってきたと。すごいなと思いました。彼女は多重人格だったり、いろんな障害を持っていますから、このお母さんの元で育った子どもたちも大変だったと思います。でも、自分が受けた性虐待から、私はこの子たちを守ってきたんだ。すごいことだと思います。その言葉の裏に、彼女は自分の家族との別離というものがあったんですね。ですから、彼女の闘いは、孤独との闘いではなかったのかと思います。

この被害者も含め、私は70人以上の人たちを取材させていただく中で非常に面白いなと思ったのは、一番最初に言いましたが、どうして自分の顔と実名を出して話をしたかという、やはり、「どうして私の身にそのことが起こったのか」という答えを求めていたというのが1つあると思います。どうしてそれが大切かという、その答えを見出すことによって、その人が前進していけるからなんです。

それまでずっと足踏み状態で、どうして私にこんなことが起こったんだというところで足踏みしていた人たちが、その理由を見付けることによって、前進していくことができるからなんです。

どういうことかという、こうやってスピークアウトすることによって、同じような状況の人たちに誰か1人でも「あなたは大丈夫よ」と声を掛けてあげることができたら、誰かに「あなただっずっと生きていていいんだよ、そのまま生きていていいんだよ」ということが言えたら、それだけで自分が受けた苦しみにも意味が見出せるわけです。誰かの助けになりたい、それはあるカウンセラーの方が「サバイバー・ミッション」という言葉で表現していましたが、そういうことによって、自分がまた前進できる。その答え、それが何なのかということ。でも、何もみんながみんな本を書いたり、大きなプロジェクトができたりというわけではないです。

私が会ってきた70人以上の人たちというのはほとんど、いろんな苦しみに遭っている人たち、いろんな精神障害を抱えながら、その日その日を生きている人でした。その人たちは私のカメラの前にたたずむことしかできなかったのですが、それによって、その人たちがアメリカ各地で、そして今は日本で、性暴力の実態について訴えてくれるわけです。それによって、社会が目覚めてくれる。社会が、もっと関心を持ってくれる。それによって、彼女たちの自尊心が少し変わってくるんですね。そして、自分の価値というものを見出し始めるわけです。

日本では、被害者の人たちというのは、まだまだ顔を出して、声を出すというのがなかなか難しい社会ですけど、それができるようになったら、それがしやすい社会になったら、それを聞いてくれる人が増えたら、もっと被害者が生きやすい社会になると思います。そして、そんな被害者たちに長期に渡る支援という

のが必要でなくなります。

私がどうしてアメリカで敷かれている被害者支援体制の成功例かという、私は結婚して子供がいるんです。普通に恋愛して、普通に結婚して、普通に子供がいるんです。多くの性暴力の被害者の女性たちは、それができないでいます。私は、自分は自分でよいと思っているし、今の自分が好きだし、前の自分も別に悪くはなかったけど、今の自分でもいいわと思っています。自分が幸せだと思えるのです。ですから、いかに早くから支援を受けて、「あなたは悪くないんだよ」という言葉を刷り込まれて、まわりにはあなたには味方がいるという認識が与えられることによって、被害者のその後は本当に天と地の差です。それができやすい社会作りが、これからとても大切になってきます。

特に日本のこの財政難の中では、長期の支援を必要とする人間が増えれば増えるほど、それだけ出費が増え、生活保護を必要とする人が増えます。引きこもりをする人も増えます。自殺者も増えます。被害者が被害後も住みやすい社会作りというものを、私たちはこれから進めていく必要があるのではないかと思います。

三重県でも、これからワンストップセンターを立ち上げようという動きがあって、とても嬉しく思います。その中で、地元にあった、その土地の文化にあった、その土地で生活している人たちの特徴というものを踏まえた上で、その土地にしかできない支援の仕方というものがあると思うのですね。そういうことを考えて、様々な人たちが支援を受けられる社会というのを、私は望んでいます。

時間が来ましたので、これで終わらせていただきますけれども、後でまたパネリストとして出てきますので、その時に、話し忘れたことがあればそこで話させていただきたいと思います。今日は、どうもありがとうございました。